



江戸の伝統織物 伝え続けるしわ 高島縮（滋賀・新旭町）

著者	大西 正曹
雑誌名	日本経済新聞 まちかど羅針盤
発行年	1999-01-05
権利	(C)日本経済新聞社 このデータは、日本経済新聞社の許諾を得て作成しており、無断での複写・転載は禁じられています。
URL	http://hdl.handle.net/10112/7274

まちかと羅針盤

1999. 1. 5 日経新聞

● 江戸の伝統織物 伝え続けるしわ

高島縮（滋賀・新旭町）

若狭の小浜は室町時代から塩、海産物、魚介類の集積地としてだけでなく、国際貿易港の機能も保持しており、この地に諸外国からの物産も集積していた。この小浜と京都・大阪を結ぶ要衝、今津町に隣接するのが新旭町である。近江の守護である佐々本源氏を祭り、五月十九日には「馬祭り」で有名な「七川祭り」を行う大荒比古神社や、国の無形文化財に指定されている大日如来を祭る大善寺などがある。自然も豊かで風車のある風光明媚な町だ。

この町は滋賀県の北西部、高島郡の中央に位置し、琵琶湖の西岸に面している。年間降雨量が多く、特に晩秋のころ、上空が晴れているのに雨が降る「高島しぐれ」と呼ばれる現象が起きる。

このような気象条件と、安曇川、琵琶湖のほとりという条件が、多湿を好む織物業に適していた。中でも「高島クレープ」は「高島縮」として古くから有名で、江戸時代から生産されていた。織物にシボ状のしわを作った独特の製品で、肌着や夏用の衣類に広く使われ、全国の生産シェアの七〇%を占めている。

高島縮の元祖は湖西の近江商人、桑原喜兵衛氏。庄屋であり、年貢米をきちんと納めた報償として代官から糸を入手。それを布にして京都で販売し、大きな利益を上げ、次第に糸から布まで一貫生産する一大産地に変わっていった。

廉価な輸入品との競合にも直面したが、デザインを公募し、下着だけでなくファッション性のある新規用途の開発に取り組んだ。また京都の大手織物メーカーと組んで新たな販路を開拓、さらには「高島縮」のネーミングで売り出し、包装の一新も図って市場を掘り起こしていった。

先達の創意工夫の精神は今に受け継がれ、経営の再構築を成功させたのである。

（関西大学教授 大西正曹）